

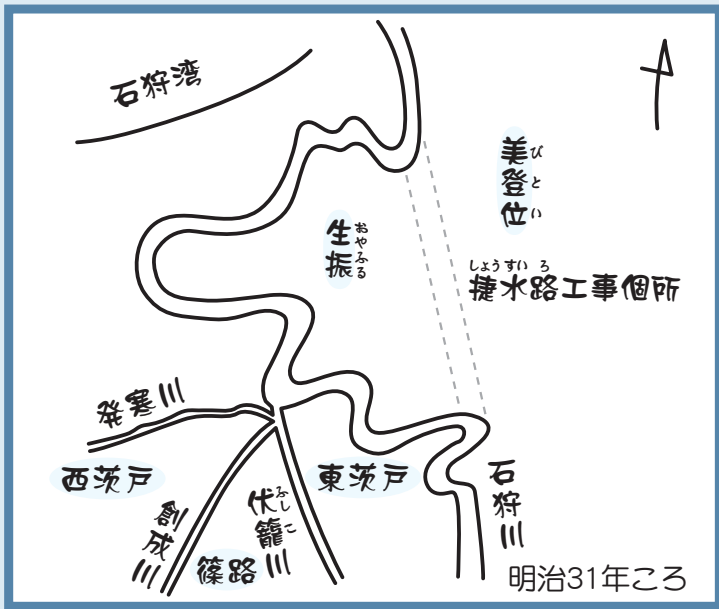


2004年8月撮影

茨戸川の変遷を

たどる

区内を流れる伏籠川、創成川、發寒川が合流する茨戸川。この川が、実は三日月湖であることを皆さんはご存知でしょうか。今月は、幾度も形を変えた経緯や周囲に住む人たちとのかかわりを中心に、茨戸川の歴史に迫ります。



茨戸川は石狩川だった

アイヌ語の「イシカラベツ」(非常に曲がりくねった川)が由来と言われる石狩川は、サケやワカサギ、ヤツメウナギなどの水産資源に恵まれ、古くから漁業が盛んでした。また、石狩と札幌を結び、物資を船に載せて運ぶ水路として、地域住民の日常生活に重要な役割を担ってきました。

しかし、明治三十一(一八九八)年九月、全道的な豪雨と強風によって空前の大洪水が発生。石狩平野の平地はすべて水に漬かり、近年に切り開いたばかりで、しかも収穫直前の田畑や家屋、さらには尊い命までもが一瞬にして奪われてしまったそうです。

この大水害の惨状を重く見た北海道庁は、すぐに治水調査会を設立。石狩川の基本調査を開始するなど、計画的な治水事業に取り組み始めました。大正七(一九一八)年には、現在の石狩市生振と美登位の間に新しい水路をつくることで川を真っすぐにする工事(捷水路工事)に着手しました。全長約三・七キロメートルの捷水路工事は、膨大な費用を掛けて行われ、完成は昭和六(一九三一)年、実に着工から十三年後のことでした。

捷水路完成によって、蛇行していた部分が切り離され、今の茨戸川が誕生。石狩川は真っすぐになり、上流から流れてきた水は短時間で海へと流れ、洪水の起こる可能性は低くなりました。



横たいた東茨戸で生まれ育った横田勲さん。茨戸川について語ってくれました

小さいころは茨戸川で毎日泳いだものです。川エビをざるですくったり、石狩湾からニシンを運んでくる大船を見に行ったりと、川を見ると楽しかった毎日を思い出します。

けれども、楽しいことばかりではありませんでした。洪水が起きると、低地の家は井戸が使えなくなり、高い場所で見上げた井戸水を各世帯に船で配って回ったものです。それに、そのころは毎年洪水が起きたの